

A-WASS 通信 8号

<http://a-wass.org/>

会長 長澤 悟

編集 花岡 崇一

会員研修会 講演報告

1. 日時 場所 平成30年7月21日 15時～17時 森の贈り物研究会
2. 演題 「ボローニャの街づくりと建築物」
3. 講師 中澤 公伯氏 日本大学准教授 (生産工学部創生デザイン学科)

ボローニャは井上ひさし氏の「ボローニャ紀行」(文春文庫)を読んだ時からずっと気になっていました。中世からの石造りの建物、ボローニャ方式という再生精神、中小企業とグローバリズムなどいくつかのテーマが浮かんできます。ボローニャ大学に留学した中澤先生の見分と研究を手掛かりにボローニャの人々の生き方を考えてみました。



街の中心はボローニャ駅ではありません。旧市街地の広場です。ここには11世紀、商業の繁栄からローマ法研究のためイングランド、ハンガリー、ポーランドなど欧州各地から学生がやってきました。学生が管理する大学としてボローニャ大学が生まれたのです。学生のための宿舎が街の人々の家から軒を伸ばして増築することで作られました。これが街中の40km柱廊として残り、山へ20km続きます。柱廊の中の店は生き生きと活動し、日本で見られるシャッター通りはありません。中世に入ると絹糸の撚り機に街を流れるレノ川の水力を利用して、欧州一の絹織物の産地になりました。絹織物は船でヴェネツィアに運ばれ欧州中に売り捌かれました。人々は船の道を「ほんとうのシルクロード」と称します。

街の中心はボローニャ駅ではありません。旧市街地の広場です。ここには11世紀、商業の繁栄からローマ法研究のためイングランド、ハンガリー、ポーランドなど欧州各地から学生がやってきました。学生が管理する大学としてボローニャ大学が生まれたのです。学生のための宿舎が街の人々の家から軒を伸ばして増築することで作られました。これが街中の40km柱廊として残り、山へ20km続きます。柱廊の中の店は生き生きと活動し、日本で見られるシャッター通りはありません。中世に入ると絹糸の撚り機に街を流れるレノ川の水力を利用して、欧州一の絹織物の産地になりました。絹織物は船でヴェネツィアに運ばれ欧州中に売り捌かれました。人々は船の道を「ほんとうのシルクロード」と称します。



2階が工房、1階が店

この絹の道の歴史を伝えるのが産業博物館です。当時の家の地下の紡績機、運河の網目模様、何千もの部品が歯車で動きます。この建物は煉瓦工場を改造しました。「使われなくなった施設でも壊したりしない。改造し修理して、現在と未来のために再活用する」保守・運用は「工業専門学校の生徒たちが、授業の一環として」引き受けます。この専門学校が名高い職人企業(Artigiani)を支えているのです。職人企業とは、製造業では従業員が22名以下、伝統産業であれば40名以下の小さな企業のことです。ここで働いてやがて熟練工になると(そのつもりがあれば)いつでも独立できます。

一つの事例を挙げましょう。1924年設立のACMAという包装機械のメーカーはチョコレート自動包装機械を開発しました。そこで熟練工となった人々が61年独立し、IMAを設立しました。母会社の技術を持ち出すことは許されるのですが、製品として母会社と同じものを作ってはいけません。これが掟です。IMAは自動薬品充填システムを完成させました。そのようにして50社以上の包装機械企業が生まれ、日本茶の自動ティーバッグ包装もこの機械で作られます。このネットワークは「パッケージングバレー」と呼ばれ、「基本技術やノウハウを共有しつつ、各企業が得意分野に専門化した」「共倒れの危険を避けつつ、地域技術の革新を他地域より急速度で進められた」「競争と協調」が特徴です。

中澤先生は「21世紀型産業に不可欠なイノベーション」のモデルを旧市街における職人企業の情報共有の手立てに見ています。実測図から様々な企業の従業員による一定の空間内：徒歩圏内での情報交換、コミュニティー形成にカフェが有効に機能していることをみつけました。もちろん、工業高校、工業専門学校、産業会館に置かれた同窓会組織などの人的つながり、商工会・行政の施策が背景にあることは確かですが、「シルク時代からからの技術の集積、熟練工たちの巨大な情報網、職人を大切にしようという意志、そして生まれた土地で育ち、学び、結婚し、子どもを育て、孫の顔を見ながら安らかに死ぬのが一番の幸せという生き方」があるのではと考えます。物語の共有です。

仕事と住まいを失ったとき、無料宿泊所<マレッラ神父教会。午後9時から翌日正午まで、清潔なシーツと朝食付き>とい案内があります。1945年4月、ボローニャの人たちは占領したナチスドイツ軍とイタリアファシスト軍に対し、パルチザンとしてレジスタンスに参加しました。ドイツ軍は自軍の兵士が一人殺されると、仕返しに無作為に選んだ市民十人を射殺することに決めていました。引き立てられた中に、赤ちゃんを抱いた若い母親がいました。そのとき「私が身代わりに」と飛び出した男がいました。これがマレッラ神父でした。まさか神父を射殺するわけにはいかないと、処刑は中止になりました。(ボローニャ史)ドイツ軍を追い払って後、毎日食糧店の壁に座り、喜捨を乞う神父の姿がありました。無料宿泊所はこうして生まれ、いまでも修道女たちが同じ場所で運営資金を集めています。「自己責任」なんて冷たい言葉は使わない。困っている人間がいたら、とりあえず手を差し出してあげる。ボローニャの精神を「国という抽象的な存在ではなく、目に見える赤煉瓦の街、そしてそこに住む人たちのために働く」と、井上ひさしは言います。

慶応大学藤田弘夫教授は「街角で感じる『公』と『私』」(東京大学出版会刊)で、商工会の副頭取から次のような「世の定め」を聞きだしました。

副会頭「わたしたちには、どうも古代ローマの共和制にたいする憧れのようなものがあるようでしてね、商工会議所も〈市民的な徳がなければ共同体は続かない〉という意味での共和制の精神を重んじています。皇帝や司教や封建諸侯が握っていたさまざまな特権を、富裕な新興の市民たちが奪い取る。そして全市民が市民的な徳を發揮しながらいろんな組合に加わって、それぞれが代表者を選び出す。その代表者たちが市の最高政治機関をつくる。ところがいつの間にか市民的な徳が忘れられ、市民たちは大市民・大泥棒と小市民・こそ泥に分裂して、烈しく争いはじめる。同時に、有力な大組合と零細な小組合とがきびしく対立する。この分裂と対立の中から、大市民と大組合を操る者が現われて寡頭政治へ移って行く。そしてやがてこの大泥棒たちに支配権を放棄させようと志す新興市民が出現、市民的徳を發揮しながら街づくりを始める…この繰り返しの中から、自分たちの街のことは自分たちが見張っていないとだめだという考え、つまり市民的な徳がたえず研かれていくわけですね」 ※“徳”とは、庶民の“納得”なのでは。実感性が決め手。

会員申込み A-WASS 事務局 Email:general@a-wass.org

A-WASS 事務局長 花岡崇一
hanaoka@bdvision.co.jp